

道内各地で進展する地方創生プロジェクトの最前線をクローズアップ！

北海道創生ジャーナル

創る

Vol. 19

2022.3

その先の、道へ。北海道
Hokkaido Expanding Horizons.



CONTENTS

特集 若い感性で地域に新たな風を吹き込む！

01 地域おこし協力隊

- 地域教育で未来人材を育成(浦幌町／古賀詠風さん)
- 老舗菓子店を事業承継(中頓別町／中野巧都さん)
- ローカルベンチャースクールから起業へ(厚真町／西埜将世さん)

05 地域が動く・プロジェクト最前線

- 厚沢部町 『保育園留学』を通じた地域活性化・長期的な関係人口創出の取組

07 「なおみちカフェ」から ～地域創生のヒントを探る～

知事が地域訪問する機会に地域で活躍されている方をお訪ねし、その様子を紹介するコーナー

- 上川編 当麻町「サウナバス」・役場庁舎
- 釧路編 厚浜木材加工協同組合

09 「つながる。HUBest」

人と地域とのつながりを生み出すワーク施設とコンシェルジュを紹介

- コワーキングカフェ&パー大人座(札幌市) 五十嵐慎一郎さん
- コミュニティスペースイチカラ(厚真町) 成田智哉さん



特集

若い感性で地域に新たな風を吹き込む！ 地域おこし協力隊

道内の地域おこし協力隊は、毎年増
加し、地域活性化はもとより地域の担
い手確保など人の流れを作るきつかけ
づくりとして定着しており、多くの隊
員が地域に新たな風を吹き込む存在と
して地域振興の様々な場面で活躍して
います。

地域おこし協力
隊の業務は、地域
の魅力発信や移住
定住の促進、特産
品開発など幅広く
活躍しているほか
、取組をきっかけに
地域に活力を与え、
担い手育成や若者
の活躍の場づくり
に結びつけるなど、
地域活性化に欠か
せない存在となっ
ています。

地域おこし協力隊

・自分の才能・能力を活かした活動
・理想とする暮らしや生きがいを発見

“三方よし”の取組

地域(住民)

・隊員が新しい住民となって新しい風を吹き込む
・隊員の熱意と行動が大きな刺激を与える

市町村(地方公共団体)

・外からの視点を取り込んだ新しい地域づくりの展開
・住民が増えて、地域の活性化

地域資源を活かした さまざまな活動

道内の地域おこし協力隊員数は、令和2年度には686名と、多くの方々に活躍いただいております、その半数が道外からの着任となっております。

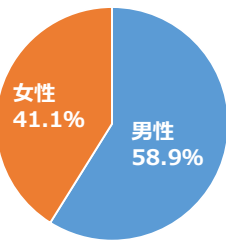
活動内容は幅広く、農畜産業などの一次産業への従事や観光資源の企画・開発、観光サービス、教育・学習支援のほか、自ら地域課題解決のためのチームを設定し、事業を推進するフリーミッション型や地方公共団体が地域で起業する人材を育成する取組など様々で、いずれの活動でも地域の資源を活かした取組が行われています。

活動後も定着し 地域活性化に貢献

地域おこし協力隊の任期を終えた方々の多くは、活動した市町村やその近隣市町村に定住し行政関係や農業、飲食サービス、観光業などに就業しています。また、カフェやレストランなどの飲食業、デザイナーや写真家、ゲストハウスを始める方、農家として就農する方など様々で、最近では、後継者不在の老舗店舗を引き継ぐなど、事業継承される方もおり、自身がやりたことを実現させて地域に貢献するなど、地域づくりの担い手として引き続き地域活性化のために活躍されています。

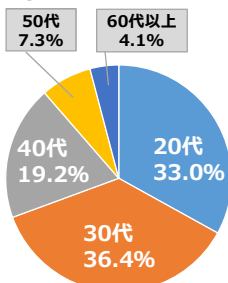
隊員686名の内訳

①男女構成



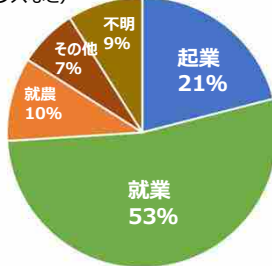
(R2.3.31現在)

②年齢構成



道内に定住した隊員の進路

- 主な起業分野
 - ・飲食サービス業（古民家カフェなど）
 - ・デザイナー・写真家など
 - ・宿泊業（ゲストハウスなど）
- 主な就業分野
 - ・行政関係（自治体職員・集落支援員など）
 - ・飲食サービス
 - ・農業



(R2.3.31現在)

北海道の活動支援

道では、協力隊・地域・市町村の思いが一つになり、地域活性化が図られるよう、地域おこし協力隊制度の効果的な運用や活用促進に向け、次のような取組を行っています。

①情報発信

協力隊の活動状況、募集・採用情報、定住・定着に向けたサポート情報などをウェブサイト上で得ることができるよう、ホームページで公開しています。併せて、協力隊員へ直接発信するメールマガジンを発行しています。（左記QRコードからアクセスできます。）



<ホームページ>



<メールマガジン>

②活動サポート

総務省や地域おこし協力隊サポートデスクと連携し、協力隊制度を効果的に活用するためのサポートをしています。また、市町村職員などの実務担当者や協力隊員を対象とした研修も行っています。

③定住・定着に向けた支援

任期終了後の定住・定着に向けて、起業などに利用できる制度の周知や隊員向けの個別相談会の実施、住宅・リフォームローンの周知・PR等を行っています。

次ページからは、協力隊・地域・市町村それぞれの思いがマッチし、地域資源を活かした事業を展開する地域おこし協力隊員・元地域おこし協力隊員を紹介いたします。



▲「うらほろスタイル複合施設FUTABA」
町内外から来る人々の交流拠点にもなっている。



▲浦幌部の中学生と一緒に活動をする古賀さん



浦幌町
地域おこし協力隊

古賀詠風さん

えいふう

・地域の教育で未来の人材を育てる



浦幌町では、地域に住む大人が、過去から受け継いだ地域を次の世代に引き継ぐことを目指し、子どもたちを軸に、学校や地域が連携して様々な事業に取り組む「うらほろスタイル」を実践しています。

古賀さんはそんなうらほろスタイルの魅力に惹かれ、地域おこし協力隊となり中高生の地域活動のサポートに取り組んでいます。

▼浦幌町との出会い

教師になることを志し、大学で教育について学んでいたものの、どこか物足りなさを感じていた古賀さん。学びの場をキャンパスの外にまで広げ、地域活動に参加することで、「学校教育の外にも教育がある」という思いが日に日に増していきます。その活動の中で浦幌町の地域おこし協力隊の方と出会い、「うらほろスタイル」を知り、実際に浦幌町を訪れました。

そこで教員だけではなく、地域全体が一丸となって子どもたちのために取り組む姿を目にしたことで、「ここで教育に関わってみたい」と思うようになり、地域教育に携わることの出来る浦幌町の地域おこし協力隊を選択しました。

▼浦幌部との活動を通じて

浦幌町では平成22年に浦幌高校が閉校となり、町内には高校がありません。しかし、閉校から5年、町外に進学した高校生たちが、地元との関わりを持ち続けたいという思いから、平成28年に自分と地域の将来について考え活動する「浦幌部」という団体を立ち上げました。古賀さんは放課後や土日などの学校時間外に、浦幌部の生徒たちと一緒に、町のためにできることを考え、高校生の思いを形にできるよう活動をサポートしています。また、中高生たちと対話し、ものの見方や考え方を深め、自分の人生について見つめ直す進路相談のような業務も行っています。

令和2年度には、活動が制限されているコロナ禍においても、高校生たちが自分たちが出来ることとして映像制作を始め、町の様子をYouTubeで町外に発信しています。そして、高校生の背中を見ていた中学生が「中学生版浦幌部」を立ち上げ、今では期間限定のカフェを開いたり、地元を題材にした絵本を作るなど、浦幌との関係が得られる様々な活動を繰り広げています。

子どもたちの「やりたい」が詰まった企画提案を町の大人たちと一緒に実現することで、中高生が地域の魅力を再発見し、自分たちの町へ自信と誇りを持つようになり、それを次世代へ継承してゆく流れが生まれています。

担当者 の 声

浦幌町まちづくり政策課
係長 井上 亨さん

町の方から「地元以外の方が町のために頑張っている姿を見て、自分たちも町の活動に参加してみようと思った」というありがたい声をいただきました。何にでも興味を持ち、人なつこく、地元のコミュニティにうまく溶け込んでいる彼だからこそ、このように成功しているのだと感じます。

▼子どもたちの変化と今後について

「3年間の活動を続けるなかで、もっと町をよくするために何かしたい、といった子どもたちの自主的な活動が以前よりも活発になってきたと感じています。町外に進学などで浦幌に在住できなくても地元と関わりたいと思っている多くの子どもたちにきっかけを作れたことは大きな可能性を感じています」と語る古賀さん。地域に仲間が増えたことや、子どもたちの成長を見届けられること、なにより自分がもっと町で活動が続けたいと思ったことから任期終了後も、町内で中高生や若者の学びに携わっていく予定です。

「これからも町の中で学びの機会を創ることはもちろん、町外に離れた若者たちが、もう一度町と関わることにアプローチしたい。その機会を創り、もっと地域との関係性が得られる瞬間を、子どもたちの日常に創っていききたいと思っています」と意気込む古賀さんのチャレンジはまだ続きます。



▲とらや菓子店から引き継いだ「砂金ようかん」



▲中野商店外観

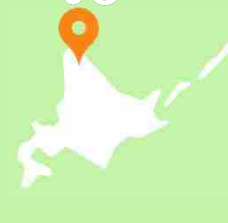


中頓別町
元地域おこし協力隊

中野巧都さん

株式会社ナカノ

・老舗菓子店を事業承継し地域の魅力を創る・



北海道の北部、宗谷管内中頓別町で

地域おこし協力隊として活動していた中野さん。協力隊の活動期間中に町で75年続く老舗の「とらや菓子店」が閉店することを知り、事業承継し、新たに「中野商店」として開業しました。現在は地元の雇用創出の場や商店街の更なる活性化の一助になりたい思いで地域の魅力づくりに取り組んでいます。

▼協力隊時代の取組と気づき

中野さんは協力隊時代、主に町の移住促進や観光振興業務に従事していました。その後活動の中で、中頓別町で採れた生乳を加工した商品の開発を目指し、カッテージチーズの商品を開発、商談会で好評価を受けたこともあり、商売として「ものづくり」をやっている可能性を感じました。

任期終了後も「ものづくり」を通して地域の魅力を発信したいという思いをもっていたところ、商工会の方から老舗の「とらや菓子店」が閉店するという話を聞き、故郷には戻らず中頓別町に残り、菓子店の事業承継を決心しました。

▼事業を受け継ぐ

任期最後の年、中野さんは事業承継に向けてとらやの店主から、お店のお菓子の作り方を学びました。これまで製菓に携わることが全くなかった中野さんでしたが、失敗を繰り返しながら、地元の人に愛されていた羊羹や最中などの商品を受け継ぎました。

そして、開店のための店舗の改装など、多くの地元の人たちの協力を受け、「とらや菓子店」が「中野商店」としてリニューアルオープンしました。

▼大切なのは「地元志向」

「店舗を運営していく上で何より大切なのは、地元のお客さんに愛着をもってもらふこと」と語る中野さんは、観光客をメインターゲットにせず、出店のハードルが低いからと安易にネット販売することもなく、地域密着型の営業を続けています。

▼キッチンカーでの新たな挑戦

近隣の人にも知ってもらうため、SNSでの発信やチラシの配布を行いました。情報が届かない層がいると感じ、移動しながら直接宣伝・販売が出来るキッチンカーを整備しました。移動販売を続けるうちに「宗谷を代表するソウルフードを作りたい」との思いが芽生え、より多くの人に食べてもらうため、好き嫌いが少ないカレーの販売を始めたところ、宗谷地域で徐々に口コミが広がり、町外の人を呼び込むことに成功しました。

▼地域とのつながり

現在では、田舎暮らしに関心を持っていたご両親も中野さんの活動を応援するために町内に移住し、飲食店を始め、町内外の方々が交流できる場として、新たなコミュニティとしての役割を担っています。

中野さん自身は今後、文化やお祭りの面でも、一つでも多くの魅力を創って発信していきたいと考えています。

中野さんは「こうした地域を巻き込んだ取組で地域おこしにつなげていきたい」と笑顔で意気込みを語ってくれました。

▼地域に根付くために

地域に根付き、地域の魅力づくりに取り組む中野さん。ご自身の経験から自治体と協力隊のミスマッチを防ぐためには、双方が思い描く地域のビジョンを共有することや、3年後（任期終了後）の選択肢を一緒に考えることが、地域への定着を図る上でも大切だと教えてくれました。



▲行列を成すキッチンカーでの移動販売と大人気の仕込みカレー



▲「馬搬」は山中で伐採した木を馬で運び出す作業のこと。かつては北日本を中心に盛んに行われていた。重機や化石燃料を使わず、作業道も最小限で済む点が環境に優しい。

【プロフィール】

1980年恵庭市生まれ。林業会社などに勤めた後2017年から地域おこし協力隊に。現在は西埜馬搬を営む。



厚真町
元地域おこし協力隊 西埜将世さん

まさとし
西埜馬搬



ローカルベンチャースクールから起業へ

馬の力を利用して、伐採した木を運び出す「馬搬」。その魅力に惹かれ、馬と共に暮らし、馬搬で生計を立てていきたいと考えていた西埜さん。そんな時に知人の紹介がきっかけで、厚真町ローカルベンチャースクール（以下LVS）を知り、応募を決意します。

▼起業を目指して

厚真町では、地域おこし協力隊制度を利用して起業を目指す人を育成する取組、LVSにより地域活性化を進めており、選考による事業プランの磨き上げを経た後、経営ノウハウや先輩起業家とのネットワークづくりなど、様々な支援を行っています。西埜さんの馬搬で起業したいという強い意思と、LVSが求める挑戦を実現する人という人物像が合致し、2017年に地域おこし協力隊として採用され、西埜馬搬を立ち上げました。

▼馬搬の付加価値

馬搬で切り出した木の一部は、西埜さん自らが買い取り薪として販売しています。環境に配慮して伐採されている点が木材に付加価値をもたらし、最近では西埜さんの薪を指名して買い求



▲ポニーと触れあう子ども達。「馬搬だけでなく、教育面でも馬とともに関われるのはすごく面白いこと」と西埜さん。

める人もいます。また、薪はふるさと納税の返礼品としても需要が増えており、町のPRにも貢献しています。

▼馬がつなぐ地域や人とのつながり

西埜さんは、学校や放課後児童クラブの子ども達を対象とした体験活動にも携わっています。「最初は怖がっていても、お世話をする中でコミュニケーションをとれるようになり、手綱を持って馬を動かせる楽しさを感じる子どもが増えてきた」と子ども達の変化を振り返り、「もっといい活動にしていきたい」と意気込みを語ります。

また、西埜さんの林業現場には、子どもからお年寄りまで様々な人が集まっています。見学したり、作業を手伝ったりという、普通の林業の現場では見られない雰囲気生まれるのも馬搬の魅力であり、同時にそれは、地域のコミュニティの場としての役割も果たしています。

担当者の声

厚真町産業経済課
主幹 宮久史さん

西埜さんを採用した決め手は、「馬を使った仕事で食べて行く」と自分の生き方を決めていたからです。だからこそ、3年の任期を経てどうなるのか応援したい、地域の人たちにも彼のチャレンジを説明出来ると思いました。任期後、無事に独立できるかは誰もわからないリスクが伴うもの。しかし、成功しても失敗しても、説明責任は役場が負うものだと考えています。やりきってくれる人を呼ぶ、来てくれる人を信じた上で応援する、お互いの腹のくくり方が大切なのだと思います。

さらに、西埜さんの元には、インターンの大学生など林業や馬搬に興味のある人が訪れることもあります。中には、インターン期間中に地域との関係を発展させ、その後も町内の農家さんの元でアルバイトを始めるなど、新たなつながりを築いて活動している例もあるそうです。

▼起業を通じて

馬搬をきっかけに、町内外で人と人とを結ぶ循環が生み出されているのも西埜さんの「やりたいこと」が生業として実現できたからこそだと実感されます。チャレンジする仲間を求める厚真町に、今後も注目です。